

スクール・カウンセラーだより

～寄り添いのまなざしを大切にします～

令和8年(2026年)7月発行

スクール・カウンセラー
やまき まさはる
八巻 正治

文部科学省が、小学校から高等学校段階までの生徒指導の考え方や実際の指導方法等について、学校・教職員向けの基本書として作成したのが『生徒指導提要』(令和4年12月・改訂)です。その最初の部分には「生徒指導の目的」が、以下のように述べられています。

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

また、「生徒指導の実践上の視点」として「自己存在感の感受」が述べられています。

…学校生活のあらゆる場面で、「自分も一人の人間として大切にされている」という自己存在感を、児童生徒が実感することが大切です。また、ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感や、他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことも極めて重要です。

ここには「自己実現」「自己肯定感」「自己有用感」といった言葉が示されています。そして、これは子どもたちのみならず、保護者さんたちにとっても保持すべき大切な視点でもあります。すなわち、自分のことを大切に感じる人が、相手のことを大切に感じることも難しいからです。つまりは表裏一体だからです。

自分への不満が、物や他者への攻撃となって現れることもあります。それによって自らを癒そうとするからです。怖いのは、やがてそうした破壊のエネルギーが自分自身に向かってしまうこともあるからです。リストカットによって自分の体を傷つけようとする子どもたちを何人も見てきましたが、ほんとうに気の毒です。

個人的なことですが、こころ優しい両親に育てられながら、ある時期の私は学校に行く気にはなれず、引きこもっていたことがあります。そして家にあった家具類を壊しまくっていました。そんな情けない私を見ながら母親は、ただ黙って泣いて耐えてくれました。それしかできなかったからだと思うのですが、私はその涙で救われたのです。それによって寄り添うことの大切さを知り、やがてこうした領域で歩むことにつながっていったのです。

劇作家であり、演出家でもあった真山美保さん(1922年－2006年)の作品に『泥かぶら』という作品があります。その作品の絵本版(2012年・瑞雲舎出版)を紹介した文章には以下のように述べられています。

その昔、ある村に「泥かぶら」とよばれた一人の女の子がいました。ひとりぼっちの「泥かぶら」は、みにくいからと、きたないからと、みんなからばかにされ、ひどい仕打ちを受けるたびに、人をうらみ、らんぼうになるばかりでした。そんな「泥かぶら」に、旅の老人が教えてくれたのです。三つのことを守れば、きっと美しくなれるのだと。…

旅の老人が教えてくれた「三つのこと」とは、次のことです。「いつもにっこりと笑うこと。他人(ひと)の身になって思うこと。自分のみにくさを恥じないこと。来る日も来る日も守ってごらん。きっと美しい人になれる。」

皆さまご自身が、いつもそうしておられるように、微笑みを絶やさず、相手への思い遣りの心を持ち、自分の弱さを恥じることがないような、そうしたまなざしを大切にしようとする歩みをこれからも続けたいですね！

※八巻が直接、お目にかかって、お話を聴かせていただくこともできます。どうぞ学校を通してご連絡ください。